



## YNAC未来日記 2 1

市川 聡

20XX年、浜崎宏美はYNAC宮古島支店の支店長として、宮古島へ旅立った。宮古島でダイビングと出会った彼女としてみれば、故郷に錦を飾るような気持ちであったに違いない。これでYNACの支店も7店目である。

一方コタキナバルで開催されているインターナショナル エコツアーアワードに参加している岡田愛から、至急のメールが入った。岡田愛率いるYNAC対馬支店の「対馬の時空横断天童シーカヤックツアー」が、見事、本年度のエコツアー オブ ザ イヤーに輝いたそうである。YNACが選ばれるのは、屋久島に次いで2度目の快挙だ。

このとき社長松本毅は、残り少ない髪の毛を吹き飛ばされないようしっかりと押さえながら、自家用のジェットヘリに乗り込むところであった。国後島で開催されるエコツアーに関する国際シンポジウムでの基調講演が今度の仕事だ。ようやくロシ

アから返還された国後島では、経済建て直しのためにエコツアーを積極的に推進している。今回は国後支庁からの積極的なYNAC誘致を受けての現地視察も兼ねている。

すっかりロマンスグレーとなった小原比呂志は、ガイドの傍ら、屋久島大学の非常勤講師として、環境社会学部エコツアー学科の学生の指導に余念がない。この中から全国に有能なエコツアーガイドが送り出されている。もちろんYNACの若手も小原ゼミ出身者が主力だ。

ホテル勤めの経験があるの藤村早苗は屋久島レインフォレストロッジの経営を一手に任されている。東シナ海を望む小高い丘のこんもりと茂った森の中につくられたロッジは、屋久島のエコツアーの拠点として世界から来訪者が絶えない。忙しくてなかなかガイドにできることができないのが悩みの種だ。

持原道子は、今日もYNAC農場の

片隅でタヌキの皮をなめしていた。旺盛な好奇心と食欲を誇る持原は、YNACの食の供給を担当している。無農薬有機農法にこだわった広大な牧場と農場を切り盛りするとともに、新たな食文化の創造を目指して、今やすっかり復活した感の強いタヌキの汁物を、極めているところだ。

一方2001年以来続いているタスマニアツアーが縁で、YNACもいよいよ海外進出を図るときを迎えた。オーストラリアでのファームステイの経験のある村形久美子は、その堪能なオーギーイングリッシュを生かしてYNAC初の海外支店の準備室長に抜擢され、タスマニアに出張中である。

私？私は今トカラ馬にまたがり、花山の森を優雅にガイド中！

21世紀が皆様にとって希望の世紀となりますように。

「屋久島自然クラブ2000」の記録



かねてからYNACには、島内でみんなが楽しみながら屋久島のことを学んで行くような機会を作りたいねというアイデアがありました。ミレニアムを迎えようという1999年の11月、ついに「やろう！」と決定。月に一回の活動予定で、渡り鳥の様に、暑い時期にはずいずいところ、寒い時期にはぼかぼかしたところと、季節に応じて動き回ろうという作戦です。そんなフィールドをいくつでも選べるのが屋久島の凄いです。楽しそうなプランがすぐに出来あがるのです。島内限定で新聞ちらしを配ると、希望者リストは30名をオーバー。「屋久島自然クラブ2000」という月1回の活動が順調にスタートを切りました。

第1回 2000/12/12 明星岳参り 参加者17名

明星岳は、屋久島の山としては例外的に花崗岩ではなくホルンフェルス(堆積岩変成岩)で構成された、猫の耳のようなシャープなシルエットの名峰。自然クラブ第一回目のこの日、大気は澄みわたり、終日気持ちよく晴れていた。旧タングステン鉱山から登山道があり、頂上付近は狭いながらスダジイ、ウラジロガシ、イスノキ大木が多い照葉樹林。途中にはびっくりするようなコブコブのヒメシャラ巨木(たぶん島内最大!)もある。600mの頂上からの安房方面は、空から生活をのぞくような親しみのある風景で、安房の人は「家が見える！」と大喜び。宮之浦岳もきれいに見える。下山の途中、列の中間部がクロスズメバチにおそわれる。四人さされた。が、看護婦軍団が、タンニン酸で救急処置。医療関係者の層が厚い頼もしさを初回から実感したのであった。(小原)

第2回 2000/1/23 七五岳参り 参加者18名

七五岳は神隠しの伝説で名高い屋久島南西部の名峰。北面は高さ400mに及ぶ屋久島最大の岩壁である。この日南東の生暖かい風が吹き、七五岳は雲の中。周辺はほぼ伐採されているものの、標高1100m以上では立派なモミ・ツガ巨木林が残り、森があまり傷んでないのがうれしい。標高1200mあたりから積雪。湯泊歩道から七五岳への道に入るととたんに険しくなる。ピー

クっぽい岩の上で「ここを頂上ってことにしようよ〜」と某氏の泣きが入るが、恐ろしいことにタフな女性陣には完璧に無視されたのであった。頂稜には針葉樹が多く、スギ、ツガ、ヒノキのほかアカマツにビャクシンまでそろっている。危なっかしいロープの岩場をこえ、岩を登ってやっと頂上。いつも清めの塩を持参する柴さんも、祠のところに集中する凍るようなビル風(?)に震え上がり、奉納できずに終わった。しかしまあ、適度に登り応えがあり、いい登山だった。(小原)

第3回 2000/2/13 西部海岸古道 参加者26名

西部の海岸沿いには、戦後、作業用の険しい山道が作られた。いまでも部分的にその痕跡をたどることが出来るが、なかでも万吉谷-川原南谷間は、親不知の嶮ばりに、青海原を眼下にしつつホルンフェルスの大岩壁をくり貫いて通過するエキサイティングなもの。(小原)

「…最初、集合して何か金属音がしました。その音のするほうに視線を向けてみると…なんと、テレビなんかで岩登りの時に使うロープとか金具の音だったので。もしかして、某CMのファイトーイッパーズ!!のノリな訳?

…しばらくすると海が開けてきて、絶壁の下に波が白く立っています。水も透き通っていて、こんな高いところにも海の底まで解ります。背後には岩壁がそそり立ち、目の前には何処までも広がる水平線と青い空を見ながら早めのお昼を取りました。そのあと、本日のクライマックスの岩場。そこには深い溝があり、下は10mくらいあります。腰には安全ロープをつけて、両手で岩を踏ん張って体を支えながら行かなければなりません。案の定、妹・真希さんは、ビビりまくっていました。腰が引けて、いつもの強気は何処へやら。」(松村 実保)

第4回 2000/3/5 花山森歩き 参加者27名

現在屋久杉の美林といえ、やはり花山が第一だろう。栗生から鹿の沢へと続く尾根の途中1200~1400mに、まるであつらえたような平坦な台地が広がり、荘厳な屋久杉の森が展開する。山道はそれなりに険しいが苦労はか

ならず報われる。(小原)

「…屋久島では、優れた芸術作品にはなかなかお目にかかれないが、その代わりことに自然に関しては、これ以上の幸福はないのではと思います。…何千年何万年代々受け継いで生き残る、霧の中の木々の姿は圧巻でした。

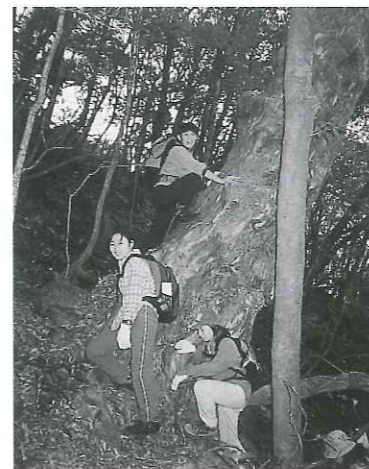
…それにこのグループは仲の良さ、自然からの優しさをいつも授かっているのでしょうか、苦しい登山でも、いたわりや笑い声が絶えません。」(津曲 兼人)

「…少し小雨が降りましたが、特別参加者の晴れ女、酒井さんのおかげで(!?)であまりぬれずにすみました。

帰路は、私の前を水野洋子さんが歩いていらっやいました。いろいろ植物をばっと見つけては興味を持ち、楽しむ姿勢に私の好奇心までも引き出され、なんだかウキウキしました。」(カコイ ミホ)

第5回 2000/4/23 春田浜 tide プール観察 参加者19名

「春田浜海岸は堆積岩と干上がったサンゴ礁がつくる広い平磯地帯で、無数の tide プールと水路に無数の生物がうごめく屋久島有数の海岸生態系フィールド。春の大潮のこの日、ついに松本講師の登場だ。海の話聞きながらキザキザの岩場を歩いて、小さな tide プールを覗きこむ。『なにもいない』…初めはそう感じるが、『ここは我慢』と松本さん。じっとしているとそのうちいろいろな物が見えてくる。岩の間に入っているタカラガイ、岩の隙間からクモヒトデの足がよるよると動き、ピョンと小さなハゼが跳ぶ。日差しが強くなってきて、泳いでいる魚が気持ち良さそう…そう感じ始めた時、『泳いじゃおっか〜』ザブン! 清水さんが勢いよく飛び込んだ。泳ぎは苦手で、しかも風邪気味だったはずの清水さんが、笑顔で初泳ぎだ。風が吹き、海面がきらめく。深めのプールは青く、海藻の緑色や紫色がゆらめきとても美しい。…さて、宴の準備をはじめようか。収穫した海の恵『イソモン』に、持ちよりのつまみと酒の山。炭火を起こし、お酒を片手に輪になって盛り上がる。浜でばいのにぎわいは、風が冷たくなり日が沈みかけるまで続いた。」(藤村)



明星岳の大ヒメシャラに戯れる嬉しそうな参加者達

第6回 2000/5/21 ヒズクシ探索 参加者24名

西部照葉樹林の南部に忽然とそびえるホルンフェルス岩塔「ヒズクシ」。島津藩政時代に作られた「屋久島大絵図」にもその名が見える、いわくありげな山である。周囲は伐採済みだが、頂上にはわずかながらあのヤクタネゴヨウが生育する。(小原)

「…手足をフルに使って登ってゆくと、目の前にヤクタネゴヨウの成木が現れる。足元のところどころには発芽したばかりの幼樹ががんばって背伸びをしているので、そっと踏まないようにルートをかえる。最後の岩盤を登り、ピークに出た。緑の西部林道越しに、青い海を眺める。今日はすこしかすんでいて、水平線が見えない。風もないので少し暑い、気分は爽快だ。下山は東鞍部から北面にまわりこみ、胎内くぐりルートへむかう。木々の生い茂る葉の隙間から、高さ100mはあるヒズクシ北壁を見上げるようになる、さてここからが核心部。いきなり狭い岩の溝に入り込む。スリリングだが面白い。大きな岩の間をすり抜けるように下って行くと、5メートルほどの岩場になる。覗いても下まで見えないのが不安だが、セットされたロープをしっかり握り締め、全身を使って降り降りる。」(藤村)

第7回 2000/6/25 栗生川登り 20名

いよいよ沢登りのシーズンである。栗生のシャクナゲの森公園から、本流の小楊子川をお谷ヶ滝まで遡る。ほんのそこまで、という距離だが水量が多いので面白い。トータルで高さ70mはあろうかというお谷ヶ滝はド迫力。滝の巨大プール手前のホルンフェルス岩盤には恐るべき深さのポットホールが渦を巻いていて、一見の価値がある。(小原)



七五岳山頂。嬉しそうな女性軍と疲れ気味の男性軍



クチナシの化粧をしてご機嫌の伊藤さん(海岸古道)

「…『10mくらいあるかなあ』などと話していた橋の上。『飛んだらほめてくださいね』なんていった手前、後には引けない。呼吸を整えようと、遠くの見ても、膝の震えは収まるどころか、腰が抜けそうになる。飛ぶ、というより足を一歩踏み出して、落ちる。落ちて落ちて、止めていた息が苦しくなる頃に、衝撃。一瞬上下がわからなくなった後に浮遊感。川の流れるのって、岩にたどり着き、興奮が冷めぬまま、みんなの処に戻り、大騒ぎをする。

だけど、今でも覚えている。今でも思い出せる。橋の手すりをまたいで見た、向こう側の景色の鮮やかさを。植林された杉や、崩れたところや、道や、もこもことした照葉樹林。私の足のずっと下にある、穏やかな深いみどり色の水。川がごつごつした岩をいくつものぞかせながら、その先の緑の向こうに消えていく。それは、とてもしずかな風景だった。刹那の永遠、なんて言葉が頭をよぎる。こんなふうに、心を残せるのなら。こうやって、ここに残る風景をたくさんもって生きていけるのなら。どんなにか、贅沢で、すてきで、しあわせなことなんだろう。」(伊藤 千賀子)

#### 第8回 2000/7/16 津森スノーケリング講習 参加者19名

「…今日の講師は、研修生の浜崎ヒロミちゃん。真っ黒に焼けた顔に満面の笑みを浮かべみんなに集合をかける。軽い準備体操の後、マスクのつけ方、スノーケルの使い方、フィンの使い方など丁寧な講習が始まる。さて、フィンも使えるようになってきたので、泳いで見ましょう。ヒロミちゃんのGOサインの後、参加者が一列になって泳ぎ出した。はじめは緊張し、何度も足をついてしまったり、前の人にぶつかったり、スムーズにはいかなかった。しかし、時間がたつにつれてそれぞれいい間隔に広がり、海の中に集中してゆく。…海の中には小さく色鮮やかな魚が無数におり、透明度の高い屋久島の海では遠くまで見える。サンゴ礁の広がるあたりにはさらに数を増し、キビナゴが群れてその体をキラキラ輝かせていた。また、岩のくぼみにはつややかなタカラガイが上手に隠れていたり、長い黒いトゲを動かすガンガゼもいる。海の中では陸上とは色も形も違う別世界が広がっていた。」(藤村)

#### 第9回 2000/8/27 安房川沢登り 参加者18名

「…しばらく大きな淵を泳ぎきったところに、大きく豪快な滝が見えた。『トンゴ滝』である。落差は20mくらいあるか。飛沫を上げてゴウゴウと流れている。滝のすぐ脇の花崗岩を上ってみるとさらにその上流にも滝を発見。なかなかの見ごたえである。」(藤村)

「…安房川の中州より、水中メガネをして結構暖かい水の中に入った。泳ぎながら水中を覗いてみると意外な程の魚種を見ることができ、又、川底にはテナガエビが乱舞し食欲を誘うものがあった。河口付近にはオオウナギやニホンイシガメも居り、川で遊ぶ機会が少なかった私にとっては何ともいえない快感だった。安房川に住む溢れんばかりのいきものたちと、その両岸の美しい照葉樹の姿に深く感銘を受けた一日だった。」(畠山

信)

#### 第10回 2000/9/10 蛇の口滝トレッキング 参加者15名

「…亜熱帯の装いを見せるこの森は、歩き始めからして面白い。薄暗く深い緑色の葉っぱの生い茂る森の向こうには、大きなピロウが林立する。植えたものらしいが、屋久島では見られない光景が新鮮だった。…天候は回復し、また太陽が顔を出し始めた。鈴川(すずごう)の本流を渡り、大きな巨岩を超えてたどり着いたところには大きな花崗岩の岩にレースのカーテンのように全体を白い水で覆う蛇の口滝だった。「おお!!」と再び参加者から歓声が上がる。日が差して滝壺の水がキラキラ光った。」(藤村)

「…まず1回目、川を渡る手前、頭上の木の枝に気づかず、おでこをゴ—ン! 2回目、大きな岩と岩の空間に気をつけて渡るつもりがズルッと滑って、リュックのおかげで宙ぶり状態。3回目、帰り道、木をつかんだら、「痛!!」。銀色の毛のふさふさ生やした立派な毛虫が左薬指にささりました。…こんなこともありましたが蛇の口滝は見事で、ブルブル震えながらも滝壺に飛び込んだりと怖いながらもすごく楽しかったのです。」(伊東由佳)

#### 第11回 2000/10/22 モッチョム岳参り 参加者10名

モッチョムは一応メジャーなので入れるつもりはなかったのだが、予定が変わり、ピンチヒッターとして選ばれた。季節がよく、快適な登山だったが、各集落の運動会とぶつかってしまい、参加者はいつになく少なめ。

(小原)

「…そのうち激しい息づかいがみんなの口元から聞こえてきた。でも不思議なことにYNACのスタッフはなぜか平気そう。『まあ仕事柄普段からこういったところは登り慣れているのだろうか』と感心して後ろからついていくと、あることに気づきました。それは決して無理な力無駄な力を使っていないということ、言葉ではうまく表現できませんが『ドタバタ登山』ではなく『トコトコ登山』なんです。…頂上からのながめはまさに絶景・絶景・絶景。パノラマのように手前には尾の間の集落から海が、背景には割石岳、耳岳をのぞむ山々の風景が悠然と横たわっている。その風景にみんなしばし沈黙。…総合的な感想としては険しさもあり優しさもあり苔の世界もありとなかなか屋久島の自然が凝縮されたとてもいい山だと思う。県道から見られる険しい岩肌とはまったく違った印象をもちました。」(新城勇人)

#### 第12回 2000/11/12 石塚山参り 参加者16名

屋久島の重心というべき位置にあり、森も展望も素晴らしい名峰。しかし最近ヤクスギランド側から登る人ができたのか、太忠岳分岐からの途中、やたらにテープやらひもやらつけてある個所があり、ものすごく見苦しい。(小原)

「…石塚山は楠川の奥岳にあたり、高さは、1589mある。のぼり応えのありそうな高さだが、小原さんもイチローさんも登ったことがないという。なんだか未知なる世界へ冒険に行くようでわくわくしていた。ところが『じゃ

あ、サナ行こうか』。…いいのか、私が先頭で?遭難しても知らないぞ。」

「…大きな花崗岩の割れ目には銅製の鳥居が立てられており、割れ目の奥に新しい祠がある。お参りをしてからあたりを見ると宮之浦岳をはじめとする奥岳が見えている。…祠から少しルートに戻り、頂上へ向かうルートへ行った。しかし、こちらはさらによくわからず、右往左往。『こっちな?あつちな?』といいながら先へ進む。かなり強引に上り詰め大きな花崗岩の壁をよじ登る。するとそこは一面の雲海で、その奥には奥岳の稜線がはっきり見えた。頂上だ!!」(藤村)

#### 第13回 口永良部島 2000/12/2-3 参加者6名

「永良部はよかど〜」  
口永良部好きの友人は口をそろえてそういうのである。「自然が残っちゃう!」  
”世界の”屋久島人にこうまでいわせる口永良部島とは何か。最終会はぜひ、行けそうで行ったことのないこの島へ、ということで、口永良部へ向かった。  
どうしても3日に帰れないとまずいことになるかわいそうなミキちゃんを残し、輝くうねりの中をフェリー太陽はどんぶらこ。島を揺さぶるような強風のなか、火口縁までは行けなかったものの、新岳中腹のマルバサツキ群落をさまよひ、七釜の照葉樹林でバードウォッチングを楽しみ(なんといっても鳥の人、水野さんがいる)、寝待や湯向の名湯にどっぷりつかって、しぶとく遊びぬいてきたのだった。口永良部では、頂上部から南部の照葉樹林あたりが国立公園に編入される話や、上屋久町のアイランドテラピー構想もあり、今後新しい動きがあるのかもしれない。…寝待温泉は、あのままにしておいてくれるといいのだが。

というわけで自然クラブ、小原と藤村の担当で1年間行ってまいりました。1回も中止することなく、毎月活動しぬいたというのも、屋久島で企画されたこの類の催しとしてはなかなかの快挙ではないかと思えます。牧瀬一郎「隊長」はじめ、スタッフとして動いてくれたみなさん、ありがとう。お疲れ様でした。

活動するなかでつくづく思ったのは、ここの登山シーズンは、秋・冬・春だ、ということでした。屋久島に「夏山シーズン」などというものは存在しません。私は断言しますが、夏に屋久島の暑い尾根など歩くのは、山を知らん者のすることです。夏は海でも川でも、思う存分素晴らしい水を楽しめるではありませんか。

それにしても、何年住んでも、どれだけ島内を動き回っても、年末にはいつもつくづく「…屋久島、奥が深いなあ」と実感。私を動かしているのは、屋久島を全貌を知りたい、という衝動です。この岩はどうしてこんな形をしているのか、この森を作るメンバーはどのようにしてここに集まってきたのか、この淵の水はどうしてこんな色なのか、このサルはどうやってここにたどり着いたのか。しかしこれは「汲めども尽きぬ、酒びょうたん」でありまして、謎は謎を生み屋久島の奥は深まるばかりです。



大きな裂け目を体いっぱい使って渡る。(海岸古道)



海も空も抜けるような青さだが、気が抜けない道が続く。

(海岸古道)



乗生川で



奥岳をバックに最高の笑顔(石塚山)

縄文杉ブームや世界遺産が広めに広めたコケの森の写真にもそろそろごちそうさまで。例会のほとんどは奥深い秘境でも有名スポットでもない身近なところで、地面から宝物を掘り出すような心持で毎月の企画を立てて行きました。実に変化に富んだフィールド群をみんなで歩いて楽しく考えて、改めて屋久島の深みを再認識した次第です。さて来年はどんな内なる世界がまっているのでしょうか。(小原)

# シカク★ナマコ

浜崎 宏美

## ナマコの生き方「もくもくと砂を食らう人生」

元浦の海に潜ると、真っ黒なニセクロナマコが真っ白な砂地の海底にゴロゴロしている。その光景はとて目立つ。私が捕食者なら、襲っちゃうゾ…

一見無防備に転がっているニセクロナマコを良く観察すると、怪しげな20本の触手をクネクネ動かしながら、海底の砂を掴んで口に運んでいる。いたずらに、その体をチョンと触ってみると、一瞬ピクッと身が縮めるが、しばらくすると、また何事もなかったかの様に黙々と食べ始める。ちょっと失礼して、今度はこのニセクロナマコを手にとってみる。柔らかい。ちょっとモミモミしてみる…んっ？なんか中にザラザラしたもの一杯入っている。

実は、ニセクロナマコのご飯は【砂】なのだ！確かに砂の中にはバクテリアや有機物の粒子が含まれているので、ナマコもこれを栄養としているのだろう。しかし、「砂を食す」動物なんてあまりいない。それはつまり、砂のような栄養価の低いものを食べても、そこから多くのエネルギーを作り出せないからだ。ではなぜ、ナマコはこんな粗食に耐えられるのだろうか？

ある本によると、「朝から晩まで、一

匹のナマコを見ていた(!)が、昼の間はよく目につく開けた場所において、砂を食べながら、動いているとは解からない程の速度で移動している」と報告されている。そして、「日が落ちると、サンゴの方へ移動し、岩の中に入って隠れてしまう」そうである。なるほど。あまり動かないから、エネルギーも、そうたくさんはいらないのだな。

けれどなぜ、あんな無防備なのに捕食者に食べられてしまわないのだろうか？

## ナマコの秘密兵器「キャッチ結合組織」

ニセクロナマコの他にも、多様な種類のナマコがいる。

イシナマコは、刺激を与えるとその名の通り石の様に堅くなる。このイシナマコで小突かれたことがあるが、涙が出た。イシナマコは、まさに石の鎧を持っているのだ。また、このイシナマコが油断しているときにグューッと指で握り締めていると、私の手形を美しく描いた状態で堅くなる。彼女にピンタをはられた彼氏の頬…といった感じだ。(私はそんなことしないけど…)

また、別にシカクナマコという種がいる。こいつは、噂の「溶けるナマコ」だ。残念ながら、私はまだこのシカクナマコに出会ったことがない。松本さ

んによれば、手で持つという刺激を与えると、最初はイシナマコのように堅くなるが、次にどんどん柔らかくなっていく。そのまま「ネチネチいじめ」を続けると、ついにはどろどろ溶け出すというのだ。ある本によると、その溶けたものを水槽の中に入れておいたら、なんと、な〜んと！約一週間後には、元通りの形に戻っていたそうだ!!!どろどろと溶けてしまっても、あせらずじっくり再生し、そして立ち直り、また、もくもくと砂を食うのだ。恐るべし！ナマコ達。

さて、この不思議な皮の謎解きをしたのが、かの有名な歌う生物学者、本川達雄先生だ。

先生は、この皮のことを「キャッチ結合組織」と名づけた。キャッチとは「掛けがね」の意味。掛けがねを中からガチャンとかければ、扉は外からいくら押しても開かなくなる。この時、押している力に対抗して、誰かが必死に扉を押し返しているわけではない。掛けがねをかけるにはほんの少しエネルギーが必要だが、一度かけてしまえば、それ以上のエネルギーはいらない。掛けがねを外せば、また扉は自由に動くようになる。

こういう原理で皮の組織を結合させてゆき、全体を堅〜いヨロイにしてし

まうのがキャッチ結合組織。つまりキャッチ結合組織とは、筋肉いらず、エネルギーほぼ不要で鉄壁の守備態勢を作り出せる、優れた省エネ型防御らしいのだ。

これらのナマコが持っている変幻自在の皮。実は、同じ棘皮動物のウニやヒトデも持っている。「キャッチ結合組織」は今のところ、棘皮動物でしか見つかっていないそうだ。

## ナマコの消極的世界観

イシナマコの石の様に堅い皮は、まさに変幻自在の鎧だ。では、シカクナマコの皮が柔らかくなるのにはどんな意味があるのだろうか？

敵に掴まれた瞬間ドキッと、ガチャンと鍵をかけたまま固ってしまった自身のキャッチ結合組織。その組織のロックを解除し、今度は全く反対にその組織を柔らかくしていくのだ。どんどん柔らかくして、ついにはどろどろ溶け出させてしまう。すると、その敵の魔の手からすると抜け出せる。皮は溶けてしまっても大丈夫。そのうちまたちゃんと再生するのだから！という様に、この「皮を柔らかくする」というのも、ナマコ達の防御の一つなのだ。

前述のニセクロナマコをこれまたモミモミ続けると、ベトベトのソーメンみたいな物を、お尻からビロロン！と発射させてくる。これはキュービエ器官というものだが、これにやられると異常にべとべとしてなかなかとれないので、敵は四苦八苦する(…?)。このナマコは一応毒も持っている。

また食用で有名な青黒い色のマナマコは、敵が来ると内臓を噴出させて、

つまり敵に「海鼠腸(コノワタ)」を進呈しておいて、その隙にすたこら逃げてしまうという。内臓はこれまた再生するそうだ(!)。

変幻自在の鎧、どろどろ溶出作戦、異常ベトベトソーメン物質、毒仕込み、内臓噴出、こういったおとぼけホラー系防衛手段を持ち、あくまで消極的に生きているナマコ達だからこそ、あまり動き回らず、エネルギー消費を最小限にし、貧栄養の砂を食べてのんきに海の底の掃除屋しながら生きていけるのだ。

今、人間界では、エネルギーの浪費が日夜話題になっている。その話題を討論する前に、すばらしきナマコの省エネ人生(ナマコ・ライフ)を学んでみたらどうだろうか。

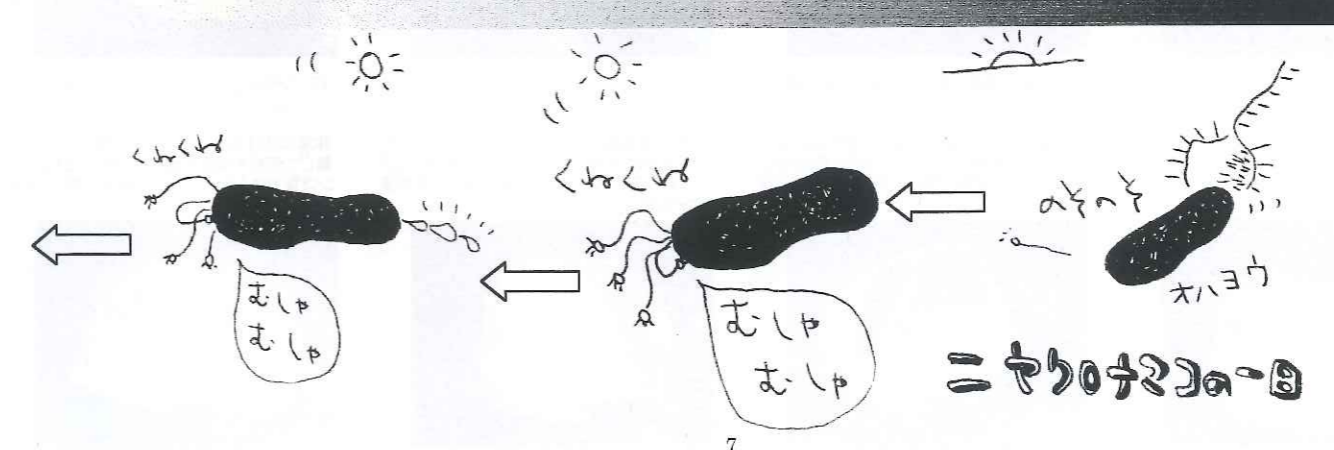
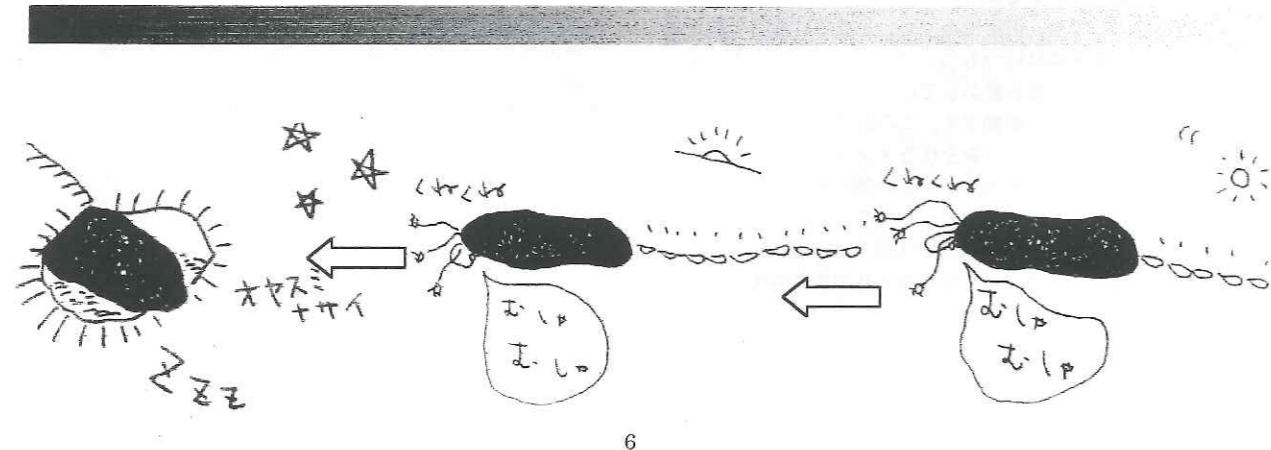
## おわりに「ちょっとだけ動く動物」

日夜動き回る私の【ものさし】から見ると、あまり動き回らないナマコ達はとても不可解だった。なぜ、あれほど動かないのに、エネルギーを獲得し、生きていけるのだろうか？と。けれども、視点を変えて、ナマコの【ものさし】でナマコを見てみるとたんに、ハッと気がついた。ナマコは、「ちょっとだけ動けばいいのだ」。ナマコからしてみれば、ちょっとだけ動けば生きていけるのだから、あくせく動き回る必要はなにもないのだ。

その生き物のものさしで、その生き物を見ることができれば、そこには今までは気づくことができなかった、そ



の生き物が織り成す「ミラクルな世界」が見えてくるかもしれない。ナマコの世界の様に…ネ★





# 対馬の森と海

岡田 愛

## いざ秋の霧島へ

村形 久美子

### 1. 対馬の森と海

はじめに

YNACの研修生になって早7ヶ月。学生時代「水面下の潜り屋」だった私は、今もっぱら「水面上の走り屋」として、イッパシのカヌーイストを目指している。そんな私の耳に飛び込んだ「対馬でシーカヤックに乗れる」と言う上司の一言で、私の心は(勝手に)対馬へ飛んだ。

そもそもは市川氏が対馬で行われる「巨樹巨木フォーラム」にパネラーとして招かれ、そこで対馬における「エコツアーの可能性」について喋るという正真正銘お仕事の旅だった。ところが、流石の市川氏だって「行ったことがない」対馬の可能性を話しようがない。そこで、事前に対馬の自然を大まかに把握する期間を設け、海の調査としてシーカヤックも加えた旅に、私が「金魚の糞」として潜入したというわけだ。

対馬は歴史に何度も名を残した島だが、何処にあるのかどんどこか知る人は意外に少なく、私も例に漏れなかった。ところが今回の旅をきっかけにすっかり対馬の魅力にはまってしまい、今号ではほんの一部に過ぎないが、私が感じた対馬の森と海を紹介する運びとなった。自然は信仰と深く関わり、歴史的にも非常

に奥の深いこの島を語るにあたっていくつか文献を紐解いたが、難しいので私にそれをまとめる力はない。ただ楽しく対馬の自然を思い浮かべてもらえるとうれしい。

#### 対馬概況

長崎県「対馬」は、九州本島と朝鮮半島の間に横たわる南北約75km、東西約12~18kmの北北東-南南西に傾く細長い島である(図1)。上島(上県郡)と下島(下県郡)の主島、及び多くの属島からなる島の総面積は奄美大島や佐渡島に次ぐ大きさで、屋久島の2倍くらいだろうか?人口も約42,000人というから、かなり大きな島だ。位置的には九州本土より韓国の方が近く、島の北側には異国(韓国)を望む場所もある。最近釜山への直行便が出来たこともあって、あちらからの観光客も増えているらしい。緯度的には大阪-和歌山あたりと同じだが、黒潮の分流である暖かい対馬暖流が冬の寒さを和らげ、最寒期(1月)でも月平均気温は氷点下にはならないと言う。また、対馬は屋久島ほどの高い山はないが山深く、この暖気流が最高峰矢立山(標高647m)を筆頭に平均200~300mの山々を駆け登って雲になる。「対馬の自然(1987)」では、標高350m付近を雲霧帯と表記し、植生もこの高さで境に変化するとしている。

このような自然現象が古代人に神霊を意識させたのか、対馬は各村に権現山、天道山と言った御神山が多く存在する。この古くから浸透している山に対する信仰が、原生の森を維持してい

る場合が少なくない。

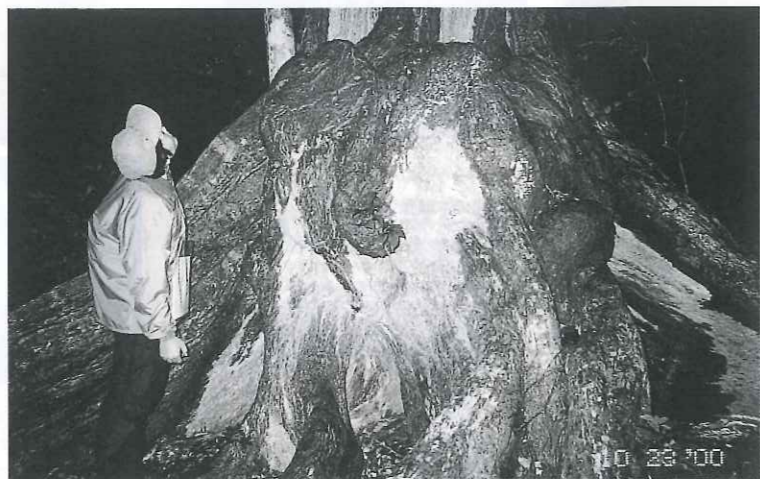
今回歩いた3つの山(竜良山・御嶽・白嶽)も一帯の森が国定公園に指定されている著名な神山で、今でもすばらしい元気な森が生きている。その中でも竜良の森はとりわけ印象的だったので、今号では竜良山を中心に対馬森編、浅茅湾を海編として紹介しよう。

#### 対馬森編1-竜良山

竜良山は、古くから神が童子の姿で降臨する霊山として崇められ、山深く耕地面積が極めて狭い対馬において、北側斜面は海拔120mくらいの緩やかな傾斜地にも関わらず奇跡的に伐採を免れ、原生の姿をとどめたすばらしい森である。

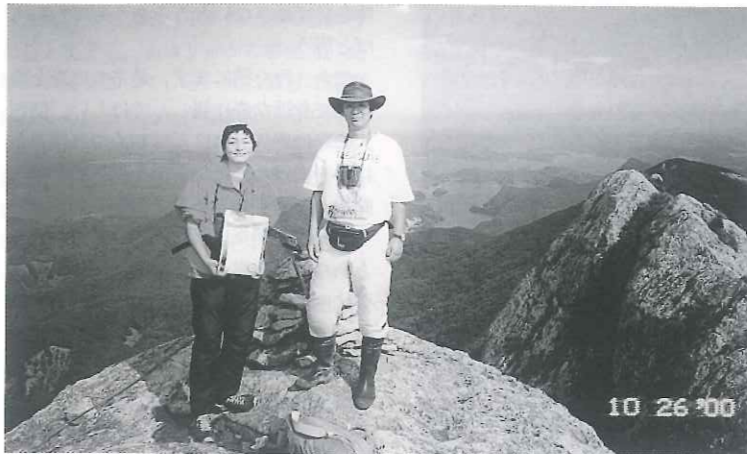
貧乏船旅の私は飛行機でひとつの上司と雨の厳原港で合流。まずは厳原町にある対馬支庁で森の様子を偵察し、もう10月末の曇天下にもかかわらず屋久島スタイル(ビーチサンダル)で意気揚々と出発した。途中ナビゲーションを誤り、「オカダアイい〜」と言われながらも何とか竜良山の麓にたどり着く。対馬では暖流の影響で海拔300m前後は良く雲が湧くと言う。この日も雨で湿度が高く、霧に包まれた森は幻想的な雰囲気を醸し出していた。

実は「パッチ状に残る自然林」と聞いてあまり期待していなかった。それに、やっぱり雨だし暗いし、憂鬱な気分が先行する。そんなときはいつもこんな風に考える。「行かないや後悔するぜえ」って。そうやって自分の気分を盛り上げながら、既に午後4時をまわった暗い林道を竜良山登山口に向かって歩いた。でも、予感



竜良山の巨大なスダイジイ。板根がすごい!

白岳山頂より浅茅湾を望む



的中行かなきゃ本当に後悔するところだったのである。

登山口でいきなり眼前に現れた見たこともない照葉樹の巨木群に開いた口がふさがらない私。スダジイやイスノキは屋久島でも白雲水峡辺りの高さ(600~800m)まででおなじみの木々達だが、屋久島で見る彼らの姿とまるで違うのだ。何と言っても屋久杉並に太いこと、そして屋久島なら真っ先に台風で折られるであろう20m前後と長身の彼らが作る雲霧林は、屋久島とはひと味違った荘厳さと奥行きを感じさせた。照葉樹の林床は暗く見通しが良いものだが、ここではツバキ科、クスノキ科の小低木群が比較的良く茂り、木々の葉が屋久島のものより丸くて大きいのも印象的だ。

道すがら雨粒で艶やかな落ち葉の影からツシマアカガエルのつづらな瞳がこちらをうかがっている。しっとりした豊かな腐葉土が足に心地よく、足下には巨大な椎の木達(スダジイ)が落とした大量のドングリが、サルのないこの島ではほとんど消費されることなく地面を覆っていた。耕作に向かない対馬の土地柄では、大昔は「榎穴(カシボナ)」と呼ばれた貯蔵穴で榎の実を保存し、これらを救急食糧として利用したという。常々屋久杉の切り株を見てそれらが生きていた森を想像してワクワクするが、今私はドングリを拾う縄文の民と同じ光景を見ているのだろうか。

この日は残念ながらタイムリミットが迫っていた。周りはイスノキやスダジイの林からアカガシが優先してきて、いよいよ雲霧帯に突入する標高まで来たようだったが、すっかり日が暮れた未知の林内で迷うのも情けないのでここで下山。麓の天道法師祠に参り、帰路についた。

#### 対馬森編2-御嶽・白嶽

御嶽は鳥類繁殖地として国指定の記念物になっており、対馬ではバードウォッチャーのメッカらしいが、麓はほとんど

スギとヒノキの植林で森らしい森は標高400m付近まで来てやっと現れる。とはいえ、ここからはおもむろに湧いた雲と竜良山で見ることができなかった素晴らしいアカガシとモミの原生林が、山頂までの神の領域を演出してくれた。

白嶽は標高こそ低いが、山頂に剥き出す石英斑岩は屋久島の黒味岳山頂を思い起こさせる。ここではこの頂上に屹立した岩頭を神霊の宿る磐座として奉っているようだ。森らしい森のない岩山だが、山頂部には対馬の固有植物が多く生息する。この日は天気が良く、山頂からは前日カヌーに乗った浅茅湾が一望できたが、異国を見たくてたまらない市川氏の念願むなしく、韓国の「か」の字も見えなかった。

#### 対馬海編-浅茅湾

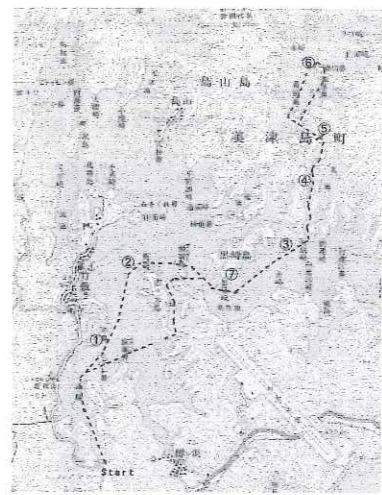
浅茅湾は島の中央部にあるリアス式の湾で、沈降海岸に特有な岬と入り江が交錯し、複雑な海岸地形を利用して湾内では真珠の養殖が盛んに行われている。内海だから波は無いに等しく、無数に点在する小島と水路の連続が好奇心をそそる。今回は、対馬で唯一シーカヤックを作っているT・T・カヤックスの塩井さんをお願いして艇を借り、案内もして頂いた。一番楽しみにしていたシーカヤッキングに終始ご満悦の2人。3日目にして天気にも恵まれ快適な浅茅湾ツーリングが始まった。

##### ①象の足

海岸線は近くから見ると頁岩の層が美しく、漕ぎだしてしばらく行くと左手に象の足形に海食された岩が横たわる。周りには孤島が点在し、どれも饅頭のようにこもり丸い。

##### ②鹿ヶ崎

対馬も鹿(ツシマジカ)の多い島で、「鹿」の字がついた地名が多い。この岬を右へ曲がろうとしたとき背後で爆弾が落ちたような爆音がした。肝を冷やした我々は「今のは何ですか?」と聞けば、



浅茅湾を漕ぐ

塩井さん曰く「ジェット機が着陸する音ですよ」とのこと。おそろしやあ〜!屋久島はジェット機なんてなくても十分だ。③矢取崎

頭切島(づんぎりしま)を過ぎると、周りほどの入り江も大抵養殖棚で、棚を移動する船の行き来も激しくなってきた。船に注意しながら両脇に浮かぶブイの間をすり抜けると、狭い水路の入口が矢取崎だ。市川氏がこの日のために改良したルアーにここまで当たりはなく、ここに来て俄然やる気だ。

##### ④昼食ポイント

水路に入った時既に1時半をまわっていた。腹が減っては戦が出来ぬ、水路の途中で遅い昼食をとることにした。横を漁船が通れば大きな横波が来るが、漁師さんもゆっくり通り過ぎてくれる。基本的に湖畔のように穏やかな海、平地があればどこでも上陸可能だ。

##### ⑤パールブリッジ

真珠養殖が盛んな湾だから、橋にも名前が付いている。この日のために購入した5万分の1の地図では道も通っていない離れ島だった島山島には、今は立派な橋が架かっている。景観はまあまあだ。

##### ⑥満切鼻

橋をくぐってさらに進むと、また饅頭のような孤島群が現れ周りが開ける。今日は時間的にここまでと言うことで、満切鼻と言う三角岩で折り返した。潮が満ちると隠れるから「満切」なのか?。この時間は潮が引いて、浅場のカヌーのすぐ下にガンガゼがウジャウジャいるのが見えた。

##### ⑦黒崎島

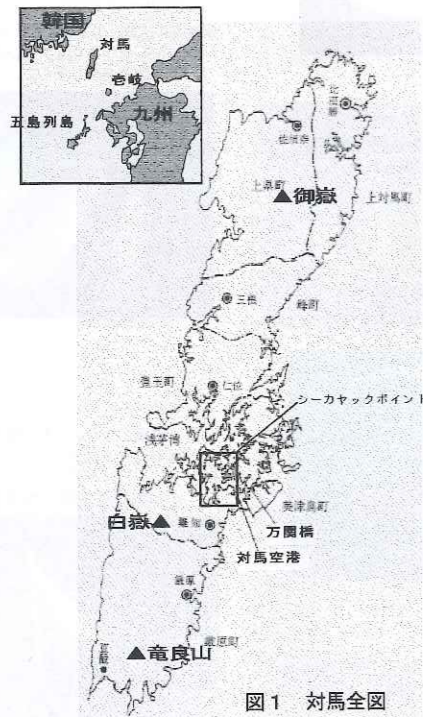


図1 対馬全図

帰りはちょっとコースを変え、黒崎島の岸壁沿いを走った。高くそびえる頁岩の壁は見事な石の層を成し、夕日を浴びて層ごとに出来る光と影のコントラストは、真下から見上げるといっそう美しい。この時間はどうやら養殖棚で働くおばさん達の帰宅ラッシュらしく、我々も帰路を急ぎつつ、漁船で帰る類々被りのマダム達に手を振った。

船着き場が見える頃にはすっかり日が暮れ、発着点付近で跳ねた魚に最後の釣果を賭ける市川氏の竿に（やっぱり）当たりはなく、いささか肩を落とす気味。そんな上司を後目に、初めて屋久島以外でカヌーに乗った私は大満足でご機嫌だった。最初は外海しかなく波が荒い屋久

島に比べると、ほとんど波のない内海にいささか拍子抜けした。でも、落ち着いて周りの景色を見るにはこういう海もなかなかいいかもしれない。今回は恒例のスノーケリングも出来なかったが、もっと対馬の海を知りたくなったので次回のお楽しみにしておこう。

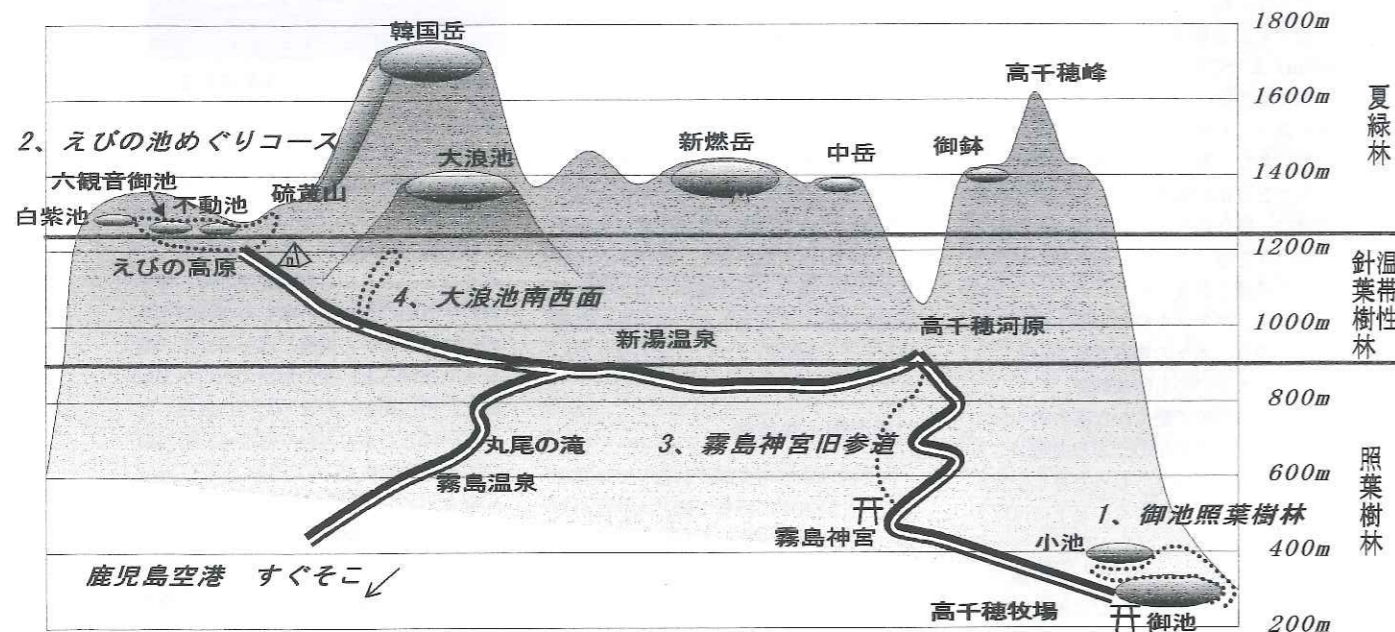
### おわりに

対馬の森の壮大さと神秘的な雰囲気、そして穏やかでやさしい海が思い浮かんだらどうか？今回天候に恵まれなかったこともあっていい絵が撮れなかっただけでなく、私の貧しい文章では、物足りなさだけが先行したのではないだろうか？決してそれを狙って書いたわけではない

が、聞くのと見るのじゃ大違い、是非本物を見て足りないところをうめてもらえよと思う。

でも、行く前にまず、最寄りの森を散策して身近な森に親しんでほしい。関西人の私は屋久島に住んで初めて森羅万象に目を向けた。だからこそ屋久島とは一味違った対馬の自然を2倍楽しめたと感えている。関東以南にお住みの方？きっとあなたなら私より5倍6倍対馬の森の姿に感動し、はじめて会った森に懐かしさを感じるだろう。だって数百年前までこんな森に囲まれて暮らしてたんだから。

## 霧島探索マップ



## 2. いざ、秋の霧島へ！

2000年10月下旬に予定されていた霧島ツアーが無くなり、では研修として行こうではないかと10月26日、小原をリーダーに藤村サナエ、浜崎ヒロミ、村形クミコの4名はフェリー屋久島2に乗り込んだ。ツアーに参加予定だったお得意様の伊藤ふき代さん、赤沼明美ちゃん、先に鹿児島入りしていた持原ミチコらとは現地で落ち合うこととなった。

10月26日(木)

鹿児島北埠頭で明美ちゃんと合流し妙見温泉のおりはし(折橋)旅館へ向かう。

途中くるくる寿司で腹を満たすが、お皿の絵柄を見間違えた浜崎は予想外の金額に「くるくる寿司って怖いですね。」とつぶやいていた。

おりはし旅館別棟山荘には、ふき代さんともちー(持原)が先に到着し、くつろいでいた。ふき代さん、明美ちゃんとの久々の再会を祝い乾杯。明日からの研修の打ち合わせをして、就寝。

10月27日(金)

### 【御池周辺】

御池は標高300mに位置し、周囲4キロメートル、水深約100mと霧島山系最大の火口湖(マール)である。周りは照葉樹

林に囲まれている。

まず目に付いたのがイチイガシ、木材として1番だから一位樫だという(写真1)。そしてホオノキ、大きな葉っぱ。2種とも屋久島には無い。

モミの木発見！サカキ、ツバキ等お馴染みの植物も目に付くが屋久島のものに比べると葉は丸く大きい。見慣れぬ形に異様な感じを抱いたが、もしかしたら屋久島のサカキ、ツバキ、その他の植物がおかしいのかもしれないとの意見が帰島後の報告会でささやかれた。

ここでは他にチシャノキ、コナラといった我々には馴染みのない植物にも出会った。分岐を小池方面へ進むと黄葉したホソバノキの葉が落ちていた。

小池に到着。

「これは食べるぞ。」小原の一声で皆わらわらと集まる。ホコリタケの群生だ。食物への愛を知っている一団は無言で採取にかかる。もっちゃんも淵にかがんで何かしている、立ち上がった彼女の手の中を覗くと小さく透明なエビが一匹いた。池の中にはハゼもいる。イノシシの足跡を発見。サザンカは満開、足下にはクスギの団栗、柿はたわわになっていた。

小池出発。行きには気付かなかったが、ヒメシャラ、カラスザンショウを見つけた。馴染みのものが出てきて藤村が微笑んでいた。初対面の人やものには緊張する質らしい。

ヒノキの植林地を抜けて県道へ出る。御池神社の入り口のちょっと大きなスギにしめ縄が巻いてあり祀ってある。御神酒と共にサカキもあった。御池神社でお詣りして池沿いを進む。またもや食べるキノコ出現、ウスヒラタケという名らしい。ウホウホと探る。

ここで明美ちゃんは鹿児島島の自宅へ、もっちゃんも屋久島へ帰らねばならない。悲しきお別れをして御池キャンプ場を出発、高千穂牧場に向かう。

高千穂牧場といえばソフトクリーム！！でもその前に、お昼ごはん！！もう15:30だ。お腹空いたよー。美味しいピザとパンを食べ一息ついてソフトクリームへ、うまい。牧場出発。

丸尾の滝は水が蒼く美しい。温泉の排水が流れて込んでいて湯気が立つ。夜はライトアップされるようだ。

ようやく本日の泊場えびのキャンプ場に到着。

キャンプ場の温泉はなんと露天風呂付き。ケビンは清潔で広く快適である。夕食は今日の戦利品、わずかながらのムカゴとたくさんキノコ、そしてチーズとパンと赤ワイン。全部とっても美味しかった、でも一番はキノコ！！

10月28日(土)

起床。昨夜は暗くて分らなかったが、美しいアカマツ林のキャンプ場だった。

朝食後、小雨の中、えびのキャンプ場出発。

### 【えびの高原周辺】

ビジターセンターで予習して高原の池巡りコースへ出発！

えびの高原は標高約1200mにあり、気象条件でいえば落葉広葉樹林帯にあたるが、火山ガスに強い植物が主体となつて森を構成している。目立つのはアカマツ。人工林の様に立ち並んでいるが、火山ガスでの枯れ地や伐採跡地に自然に一斉に生えたもので樹齢は40~50年である。そしてススキ。《えびの》という名前も火山



写真1: イチイガシと共に記念撮影(左)  
写真2: 真っ赤な落ち葉の絨毯(下)



ガスの影響でススキが海老色に染まりそれが一面に広がっているからといわれる。歩いていくと、イソノキ、シロモジ、ミズナラ、コシアブラ、ミヤマガマズミ、ウメドモキ、コマユミ、オトコヨソメと出るわ出るわ、聞いたこともない名前、見た事もない木。さすがにミヤマキリシマは名前こそ知ってはいたが、こんなに小さな葉こんなに小さな花だとは思って

もいなかった。(幾つか狂い咲きしていた。)スズタケ、ミヤコザサもワシワシ生えていて鹿の食痕が見られた。途中、母子鹿に出会ったがとても大きく、子ジカがヤクシカの親ジカだったため乳を吸っている姿がいやらしく感じた。大雨降る中歩く。

もう12:30、白紫池に到着。昼過ぎには戻る予定だったため食料は無い。とその時「たまご食べるー？」伊藤ふき代氏の天の声。コンクリートの休憩所にて雨宿りしつつ温泉たまごを頬張る。こんなに美味しいたまごを食べたのは初めてだった。この池は水深約2mと非常に浅い。10年前までは冬はスケート場となり賑わっていたのだが、地球温暖化に伴って安全な厚さまで氷が張らなくなってしまい、近くに人工のスケート場を作った。今では冬の白紫池は静まり返っているようだ。一息ついたところでさあ出発。わいわい楽しく進んで行くと、あ

った！念願のブナの木。南国の果物ランブータンのミニミニサイズに似た殻の中に丸みかかった三角錐形の実が2つ入っている。初顔の方々はコックパネウツギ、イロハカエデ、コミネカエデ。道いっばいを落ち葉が赤く染めている(写真2)。地面から生えているヤマグルマも一本見

かけた。

六観音堂に到着。突如巨大スギ出現。幹は途中から分かれ先端部は枯れかかっている。まるでヤクスギの様な。五百数十年前に島津義弘が植えたといわれているが、六観音参りの際、地元の人達も植えたらしい。ヤクスギ植樹説もあるがヤクスギの葉と違い柔らかかった。近くに子供のスギもあったが、葉はへなちょこでヒカゲノカズラの様だった。この辺り20本程スギがあるが最長樹齢は500~600年らしく、霧島でもっとも直径の大きな木はこのスギの内のひとつだ。

六観音御池が見える。周囲1.5km、水深約14m。池の周りの森は落葉樹の紅葉と針葉樹の深緑が混ざり合い、目を楽しませてくれた。さて、ここではカマツカ、ベニドウドン、シロドウドン、ツルリンドウといった面々に出会えた。ススキ野原が広がる。

不動池は、周囲700m、水深約9m。六観音御池も不動池もブランクトンが少なく透明度が高い酸性湖沼で、適当な深さがあるため美しい青色に見えるらしいが、雨の中我々が見た池の色は灰色だった。散策道の側にそれぞれ個性的な不動明王が何体も祀ってある。もう、すぐそこが県道だ。県道を越え、硫黄岳への道を進む。

### 【硫黄山】

森は無い。辺り一面ススキ野原。霧の中微かに岩陰が見える。岩の道をずんずん進むとちょっと外れてお地藏さんの群。さらに進むと南無妙法蓮華經の碑。突然浜崎が「南無妙法蓮華經なんたらかんたらほにやらほにやらほにやら。」と唱え出す。恐るべし浜崎ヒロミ、空手紫帯、得体の

知れぬ女。

硫黄山の山頂は標高 1300m。岩、岩、岩。所々蒸気が噴き出している。ここでは明治30年頃から昭和37年迄硫黄の採取が行われ、昭和30年の最盛期には月産150トンもの硫黄が生産された。黄色い硫黄の結晶があったが臭いはなかった。地面が温かい。周りは真っ白な霧で囲まれ、おどろおどろしさをあおっていた。

ビジターセンターに戻り、ずぶ濡れのカッパを脱いで復習。

16:30。お昼ご飯まだ一、お腹空いた。この時間どこも閉まっている。閉店直前の店にて、ぎりぎりセーフでそばとラーメンを食べる。途中の町で買い出しをして緑の村キャンプ場へ。

ケビンには何と(無料)テレビと冷蔵庫が！二段ベッドが2つあり、各自のスペースはたたみ一畳分であったが清潔で快適だった。温泉も申し分なく、夜食のキムチ鍋も美味しく、腹いっぱい夢の中へ・・・。

10月29日(日)

起床後、朝食のサンドウィッチを作り皆で頬張る。荷物を積み込み出発。

【霧島神宮周辺】

大きなスギが1本祀られている。高さ40m近くあるうか。ここの神様はニニギノミコト、屋久島にて祀られている山幸彦は彼の子である。おみくじを引き、千歳飴をみんなでしゃぶり、記念撮影をして次なる目的地へ。

霧島神宮の社事林を歩く。標高600m、森に射す木漏れ日が美しい(写真3)。

まず目に付いたのはツブラジイ。歯で



割って中の実を味わうとほのかな甘みを感じる。ここの樹木は屋久島の照葉樹林から針葉樹林への移行帯の森を思わせる。針葉樹や落葉広葉樹もあるが樹高が高く、目に付き易いのは下の層の照葉樹である。坂本龍馬とおりが新婦旅行で通った道だそうだ。車に乗って大浪の池へ向かう。

【大浪の池周辺】

県道沿いの簡単な駐車場には車がいっぱい。ちょっと離れた所に車を止め歩き始める。標高1060m。大きなのっぽのアカマツ(写真4)やツガ、モミ、その下にはヤクスギランドを思わせる植物達がいる。非常に歩き易く、すれ違う登山者とも爽やかに挨拶を交わし歩を進める。双眼鏡とカメラを手にごちゃごちゃ言いながら進む一団は他の登山者に、一体何の人間かと興味を湧かせたらしく、「鳥を見ているのですか。」などと何度か声を掛けられた。大きなアカマツの前で立ち止まって話していると、「この木は何の木ですか?」と尋ねられアカマツだと言うと問うた人は驚いていた。時間の都合で大浪の池まで辿り着くことは出来なかったが十分に森は楽しめた。駐車場へ行きハリモミ(Picea polita マツ科 トウヒ属)を見に車を走らせる。「あった! あれだ! あれだ!」と小原。車を止め、降りて双眼鏡にて指されたハリモミを見るがモミとの違いが分からなかった。遅くならないうちに霧島に別れを告げ鹿児島市街へ出発。

鹿児島北埠頭近くの桜島温泉ホテルに到着。

「最後の夜は外に食べに行こう。」と約1時間の自由時間を設けた後、待ち合わせ場所に集合して居酒屋へ。さんざん食べ



て23:00にホテルへ着く。またもや満腹で夢の中へ。

10月30日(月)

6:30起床。

霧島研修も終わり。小原は所用で鹿児島に残留、ふき代さんはJRで名古屋へ、藤村、浜崎、村形はフェリー屋久島2に乗り込んで屋久島へと皆それぞれに向かう先へ散って行った。

《まとめ》

霧島の植生は簡単に分けると、照葉樹林帯、温帯性針葉樹林帯、落葉広葉樹林帯と3つの分布域に分けられるが、有史以前より幾度と無く幾つもの火山が爆発したため、その新旧に因って色々な植生の遷移段階が見られる。最近噴出したのは硫黄山で植生遷移の初期段階にあたるススキ野原となっている。アカマツの純林ともいえる林がえびの高原から赤松千本原にかけての帯、大波池南斜面の新湯温泉周辺、高千穂峰の西斜面に広がっているが、これはごく最近まで火山活動の影響を受けていた所である。アカマツは陽樹なのでアカマツが生長し森が形成され林内が暗くなると種が落ちて発芽できず、陰樹のモミ、ツガ林、または落葉樹のブナ、ミズナラ林に変わっていくことが予想される。霧島の森はこの後の火山活動に大きく影響を受けながら共に変化していくであろう。

全体的な印象としては、樹高が高く、なだらかで歩き易い散策道の森だった。

周囲30km内で様々な植生を見ることができ、温泉も豊富にあり、日本初の国立公園指定地の肩書きを實力として見せられた。観光地ではあるが薄っぺらさが無く、これからの観光地としての姿を学ぶべきヒントがあるように感じられた。

写真3: 木漏れ日が美しい霧島神宮の森(左)  
写真4: のっぽのアカマツ(右)

## 小杉谷とマムシ

持原 道子

ヘビの口からヘビが出た? マムシを殺したら口から出てきたと、棒先にブラブラ下げた小蛇をおじさんが持ってきた。

秋晴れの2000年10月13日、小杉谷集落跡地でのこと。大正の末から50年にわたって屋久杉伐採の拠点となった小杉谷が昭和45年に閉山されて30年、当時集落で生活をしてきた人々とそれに興味を持った人達が集まるイベント“小杉谷ピクニック”が催され、私は裏方として参加した。閉山後二度と集落を訪れることはないだろうと思っていた人々が多かったようで、再会を喜ぶ声があちこちから聞こえ、思い出話に花を咲かせていた。自分たちの住居跡を懐かしげに歩き回っていたおじさんとおばさんが出くわしたのが、そのマムシだった。山にも田畑にもいるマムシは毒持ちで有名。大人しい性格のようだが、人が噛まれると死ぬこともある。そのまま放っておくと危険だと、殺したのだろう。

大蛇が小蛇を食ったのか? それとも口から出産か? 何がどうなっているのかわからないが、親マムシも拾ってくると腹がでかくてゴロゴロしている。これは何かいるんじゃないか? 確かめるべし。裏方参加者の一人、蛇好きハルカさんと「吐き戻し」をした。ヘビの下腹を押さえ、口の方へと親指をうまい具合に動かし腹の中身を吐かせようとするが、どうもうまくいかない。仕方がないのでナイフ片手に帝王切開。すると、粘液と共にどろりと出てきた4匹の小蛇。口から出たのと同じもの。大蛇よりも白っぽいものの、特徴的な三角ばった頭と体表の模様から、これらも同種でマムシであろう。どうやら母蛇とその子達なのか? 何故子供が腹にいるのだ?

疑問は残るが、マムシが親と同じ姿で生まれてくるというのは、目の前で明らかになった事実であったのだ。

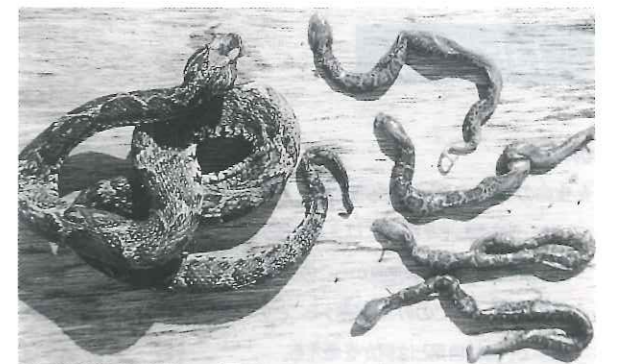
どうやら、ヘビでもトカゲでも卵生タイプの種のみならず、胎生タイプの種が1/5ほどもいるようだ。同種でありながら、分布域によって卵生と胎生の両タイプがあるコモチカナヘビという名のトカゲもいる。卵生の場合、生みっぱなしにされた卵の孵化はたいい地熱まかせ、殻に包まれてはいるもの時には危険にさらされる。しかし、母にとっては手がかからず次の繁殖へ向けての準備にとりかかれる。稚ヘビが母体である程度まで成長して産まれる胎生の場合、子供は大切に守られるが、母にとっての負担は大きい。どちらを取るにしてもメリットとデメリットがあるわけで、自分の血をどれだけ残せるかとそのために払われる労力との関係で決まってくる。胎生タイプは、寒冷

地や乾燥地といった厳しい環境で生息するものに見られることが多いのだが、マムシのようにあったか温帯でも、そして熱帯でも胎生の種はいる。卵にするか子供にするか、決め手となる真相は不明である。

このマムシの場合、口から出てきたというのは、おそらく母ヘビが無理な力を受けたはずみで子宮が壊れ、口へと押し出された末の出来事だったのだろう。持ち帰った母マムシと子マムシ4匹(1匹は置いてきた)の全長と体重は下記の通り。腹から出てきた子ヘビ1匹が結構な大きさであったこと、さらにそれを5匹も抱えていたことが印象的であったのだが、出産直前に母ヘビの抱えていた荷物は自分の体重のざっと1/5ほどもあったことになる。こりゃあ、重そうだわ。

ところで、われらヒトも胎生である。99年のYNAC看板青年相田くんがめでたく父親になったので、子供を産んだ恵美さんに話を伺った。赤ちゃん一帆くんは3190gで誕生。妊婦は胎児のほかにも胎盤や羊水、血液の増加などがあり、恵美さん自身は妊娠によって約6kgの体重増加が見られたそうだ。身近な6kgに置き換えると、3キロの米袋を両脇にかかえての生活ということか。母強し。

小杉谷ピクニックは楽しいだけでは終わらなかった。遠い昔話としてしか頭に描かれていなかった集落跡と人々の生活は、つい最近までの現実で遺物なんかではないことを実感し、マムシ出生の秘密まで知ってしまった。



・小杉谷ピクニックに関する情報は、<http://www4.ocn.ne.jp/~junjun-m/> でご覧になれます。

・相田英明さんと恵美さん、一帆くんご協力ありがとうございました。

	マムシ母	子マムシ	
全長	630mm	平均	158mm
体重	111.5g	平均	4.9g
		総重量	約24.6g

子マムシは5匹いたが、そのうち1匹は持ち帰らなかったため、4匹の平均から総重量を求めた。



## Calendar

2000年

- 8/25~29 明星学園、修学旅行受け入れ  
8/27 第9回 自然クラブ 安房川沢登り  
9/10 第10回 自然クラブ 蛇之口滝トレッキング  
9/24 小原 環境庁自然に親しむ集い講師(淀川沢登り)  
10/22 第11回 自然クラブ モツチョム岳登山  
10/23~28 市川 巨木を語ろう全国フォーラムのパネラーとして  
対馬へ(事前に市川、岡田対馬研修)  
10/26~30 小原、村形、藤村、持原、浜崎 霧島研修  
11/9~11 松本・小原、東京環境工科専門学校の屋久島実習の講  
師をつとめる  
11/12 第12回 自然クラブ 石塚山参り  
11/17~21 松本 清里フォーラム参加  
11/23~25 松本・小原、東京環境工科専門学校の屋久島実習の講  
師をつとめる  
12/2~3 第13回 自然クラブ 口永良部島  
12/10 市川 鹿児島シーカヤッククラブ主催の錦江湾再発見の旅  
に参加し桜島周辺を漕ぐ  
12/12 松本 東京大学国際開発農学フォーラムで講義  
12/13 松本 運輸省第1回エコツアーリズム研究会に出席  
12/14 松本 全国の良好なエコツアーサイトのネットワーク構築へ  
動く。  
12/16 小原 屋久島高校で授業「屋久島の地質と自然」  
12/17 第14回 自然クラブ 前岳参り+忘年会  
12/21~30 小原 台湾東部中央の富源溪へ、7泊8日の沢登り

## Library

執筆記事

★生命の島 53号「屋久島海物語」 農業をする魚 松本毅  
サンゴを殺してその上にはえる紅藻を食べるイシガキスズメダイ。  
彼らは同時に他の藻食魚からこの紅藻を守っている。一方この魚が  
守ることによってのみ生き続けることができる紅藻。連続と続く共生  
の中で、自給自足とは何かを考える。

★生命の島 54号「屋久島海物語」 死らぬが仏 松本毅

周りをうろつく無数の捕食者たちに、ノイローゼになることも、引き  
こもりになることもなく元気に泳ぐキンメドキの群。死とは何か、  
死を知るとは何か？

掲載記事

★フライデースペシャル増刊号 2000/10/23

地球を体感する「エコツアー」同行記

“いのちの島” 屋久島で「奇跡」を見た！

YNACのエコツアーに足立倫行さん(文)と秋月岩魚さん(写真)が

## Contents

21世紀を迎えて	1
自然クラブ2000活動報告	2
ミラクル★ナマコ	6
屋久島のチョウチョウウオ科の魚類について	8
国内研修レポート 1. 対馬の森と海	10
2. いざ、秋の霧島へ	
小杉谷とマムシ	15

参加し、堂々カラー6ページの同行記を書いてくれました。フライデー  
ということではちょっとドキドキしたわけですが、足立さんがきちんと硬  
派にまとめてくれたので一安心。でもやっぱり、前後はセクシーな女の  
子に固められ、「立ち読みするのが恥ずかしかった」との声もあり。さ  
て今年もフライデーの読者が、YNACを席巻する？

## 編集後記

- 最近すぐに感動し、もらい泣きしてしまうのは年のせいでしょうか？  
感動多き21世紀でありますように。(ま)
- 21世紀最初の10年は、沢屋として復活します！(お)
- 21世紀を迎えて、小学校の時ご埋めたタイムカプセルを思い出しま  
した。あのときどんな夢をもっていたのかしら？(さ)
- 皮を剥いたマムシをカリカリに焼いて食うとうまいそうです。(も)
- 2000年はナマコでしめくり。さて21世紀の最初の年はどんな  
世界の扉を開きましようか！？(ひ)
- 今年実家にタイムカプセルが届く予定。楽しみ、楽しみ。(く)
- カヌーをはじめて背中が「また」たくましくなった。フルネームで呼  
ばれるのにもなれてしまった。今年も「もっと」男らしくなりそうだ。  
(あ)
- 閉塞感のうえないミレニアムを終え、新しい世紀を迎えました。か  
つて21世紀を思い描くとき、誰もが頭ご浮かんだったのは、鏡流アトムの  
未来都市のイメージではなかったでしょうか？しかしふたを開けてみ  
れば、都市に未来は感じられません。今こそ、屋久島のなるものに光を  
見いだす人が多いのではないのでしょうか？屋久島の夢を守り、伝えてい  
く、YNACの仕事がそんな仕事になればと思っています。(い)

## YNAC通信(ワイナックつうしん)第12号

発行日: 2001年1月1日

発行: (有)屋久島野外活動総合センター

住所: 〒891-4205 鹿児島県熊毛郡上屋久町堂之浦368-21

TEL 09974-2-0944 FAX 09974-2-0945

E-mail: forest@ynac.com Url: http://www.ynac.com/

表紙写真: 屋久島自然クラブ2000『西階海岸古道』にて